

『天（空）と風と星と詩』初版本に見る尹東柱の面影

井田 泉

2023/02/11 尹東柱詩碑献花式

1. はじめに

尹東柱が福岡刑務所で息を引き取ってから、78年の年月が過ぎました。わたしが尹東柱の詩と出会ったのは、彼の詩集『空と風と星と詩』の伊吹郷さんの翻訳と、原書を手に入れた年、1986年だったと思います。37年前になるでしょうか。

わたしが尹東柱との縁というかつながりを感じるものが三つあります。一つは、彼が学んだ同志社大学でかつてわたしも学んだこと、二つは、彼が最初に留学した立教大学でかつてわたしは文学部助手を務めたこと、そして三つは、彼が学生時代にデンマークの思想家キルケゴールを耽読していたと言われますが、わたしも学生時代にキルケゴールを耽読していました。そんなこともあってですが、何より彼の詩の清純さに引かれて、わたしの心のどこかにはいつも尹東柱がいた、と言ってもいいかもしれません。

しかしそれはそれとして、今日は彼の詩集の初版本の紹介をしてみたい。特に何か研究発表というのではなくて、素朴な気持ちで初版本を紐解きながら彼の面影に近づいてみたいと思うのです。

その前に、彼の生涯をごく簡潔にたどっておきます。

1917.12.30 中国東北部間島省（現在、吉林省延辺朝鮮族自治州）^{ミョンドン}明東に生まれる——

明東はキリスト教精神による開拓村です。彼は生まれてすぐに幼児洗礼を受けました。

^{スンシル}崇実中学校（平壤）、^{ヨニ}延禧専門学校（ソウル、当時は京城）で学ぶ。いずれもキリスト教の学校です。

1942.3 日本へ渡航——平沼東柱と創氏改名せざるを得ませんでした。

留学はまず立教大学。1学期だけ過ごして秋には同志社大学に移りました。

1943.7.14 逮捕（治安維持法違反で懲役2年の判決）「独立意識ノ昂揚ヲ図リ……」

1945.2.16 福岡刑務所で獄死

1945.8.15 日本敗戦、朝鮮解放 彼の詩のわずか半年後でした。

彼は延禧専門学校に在学中、詩集を出版したいと願って19編の詩を選び、延禧の先生（^{イ・ヤンハ}李敦河教授）に相談したのですが、内容が危険視される恐れがあり、時局柄今はやめた

方がよいということで果たせませんでした。彼はそのとき、自筆で詩集 3 部を作り、1 部は李^{イ・ヤンハ}敏河先生に、1 部は親友の鄭^{チョンピョンウク}炳昱に渡し、もう 1 部は自分が持ちました。そのうち鄭^{チョンピョンウク}炳昱が保管していたものが、後の詩集の出版に用いられることになったのです。

2. 遺稿集『天と風と星と詩』（初版本）の出版 1948.1.30

尹東柱が亡くなってちょうど 2 年となる 1947 年 2 月 16 日、ソウルのフラワー会館^{ソンモンギョ}というところに知人友人約 30 名が集まり、尹東柱と宋夢奎（従兄弟で同じく福岡刑務所で獄死）を偲ぶ会を開きました。そして尹東柱の遺稿詩集を出すことが具体化されていきます。翌 1948 年 1 月 30 日、遺稿集『天（空）と風と星と詩』がソウルの正音社から出版されました。

構成 各部タイトルは次のようになっています。

- (1) 序詩 1 編
- (2) 天（空）と風と星と詩（自選詩集）18 編
- (3) 白い影（立教時代）5 編
- (4) 夜 7 編

計 31 編 （1937 [19 歳] ～1942 [24 歳]）

3. 初版に掲載された三つの文

(1) 序文 鄭^{チョンジョン}芝溶

鄭芝溶は、尹東柱からすると同志社大学英文科の先輩です。尹東柱は 19 歳の頃、鄭芝溶詩集を愛読していたと言われます。他方鄭芝溶は尹東柱の詩を高く評価し、解放後、詩集が出るまでに何度か尹東柱の詩をカトリック系の「京郷新聞」に紹介していました。

尹東柱の詩集に彼は序文を寄せましたが、その冒頭で次のように言っています。

「序——というほどのものではないが、わたしが何か真心をこめていくらかのことを書かなければならない義務を負っているのだけれども、筆を執るのが死ぬほどいとわしい日、わたしは天の衣を逆さに着て、病気ではないが呻吟している。」

尹東柱詩集を世に出すことに責任を感じ、いよいよその序文を書こうとして呻吟している鄭芝溶の激しい思いが伝わってきます。序文は 8 頁に及び、その中で彼は五つもの尹東柱の詩を引用しています。彼はこんなふうにも書いています。

「日帝時代に跳梁した附^{フイル}日^{ニッポン}文士ども」[日本におもねった文人たち]の文を見直すと唾を吐くようなものばかりだが、無名の尹東柱は恥ずかしくない悲しくも美しさ限りない

詩を残したではないか」

(2) 追悼詩「窓の外にいるなら叩け——東柱 夢奎 二人の霊を呼ぶ」 柳^{ユン}玲

追悼の詩を寄せたのは延禧の同級生で親友のひとり柳^{ユン}玲です。この詩は1年前の追悼の集まりで朗読されたものです。

「東柱^{トンジュ}よ 夢奎^{モンギョ}よ／君と楽しんで語（そら）んじ／君とうれしくて泣いた／サンブリ
삼불이も／ピョンウギ병옥이も／そしてチョジュン처중も……／いや 君の歌の1節を
まねるにも苦心したヨンイ영이〔自分〕もここに来ている。／ひどく寒い下宿部屋で／
わずかの飯を分け合いながら／詩と朝鮮と人民を語っていた／詩と朝鮮と人民と死を共
にしようと言っていた／君の友人たちが／ここに来て待ってからもう長い時間がたった。
窓の外にいるなら叩け／東柱よ 夢奎よ」

「ぼくは信じない 信じられない 君がいないことを言わねばならないこの場所など」
「泣くこともできない愚かな君の友人たちが／もう一度叫んで君の名を呼ぶから／わか
るか わからないのか／『東柱よ 夢奎よ』」

(3) 跋^{ばつぶん}文 발문 姜^{カン}処^{チョ}重^{ジュン}

「東柱は口下手でつきあいも上手ではなかったけれども、彼の部屋にはいつも友だちが
いっぱいだった」「過度に彼は謙虚で温順だったが、自分の詩だけは譲歩しなかった」

「そしてもう一つ、彼はある女性を愛した。しかしその愛をその女性にも友人にも最後
まで告白しなかった。その女性も知らない、友人たちも知らない愛を、答えもなく、戻
っても来ない愛を、ひとり大切に秘めたまま、苦しみもし、希望もしながら——気恥ず
かしいと言うか、愚かと言うか……」

このことは後で紹介する「少年」という詩に関係があるように思います。

4. 詩から浮かび上がる尹東柱の面影

ここからは尹東柱の詩のいくつかを読みつつ彼の思いをさぐり、その面影に近づいてみ
ましょう（別冊の詩対訳をご覧ください）。その際、三つの観点を手がかりにしてみます。

(1) 道を模索する 「道」1941.9、「恐ろしい時間」1941.2

(2) 人を思う 「弟の印象画」1938.9、「星を数える夜」1941.11

「少年」1939、「雪降る地図」1941.3 “順伊”

(3) 決意する 「十字架」1941.5、「序詩」1941.11

時間の関係で、ひとつひとつの詩にゆっくり立ち止まれないことをご了解ください。

(1) 道を模索する尹東柱

「なくしてしまいました。／何をどこになくしたかもわからず／両手でポケットを探つて／道に出て行きます……」

この冒頭がとても印象的ですね。なくしたことははっきりしているけれども、何をどこになくしたかわからない。それで、道に出て、石垣に沿ってずっと進んで行きます。

돌과 돌과 돌이 끝없이 연달어 石と石と石が 果てしなく続き

「トルグァ トルグァ 트리 クドプ시 ヨンダロ」この原語の響きが、そこに世界を浮かび上がらせるようです。

なくしたものとは何なのでしょう。それがわからないと言っているのですから、勝手に決めてはいけないかもしれません。しかしあえて言えば、自分の生きる目標、生きる意味、あるいは自分自身なのかもしれません。ずっとそれを探し求めていきます。

終わりのほうで

「草 1 本生えていない この道を歩いてゆくのは／垣の向こうに わたしが残っているからで／わたしが生きるのは ただ／なくしたものをを見つけるためなのです。」

とあるので、探しているのはやはり、垣の向こうに残っているはずの「わたし」なのでしょう。それとも、「わたし」が残っているがゆえに、なくした何ものかを見つけようとするのでしょうか。

道を模索する尹東柱を偲びます。

ところでこの詩については、尹東柱の自筆原稿および初版本のハングル綴りに従いました。それで今日通常用いられている校訂された標準語表記と微妙に違うところがあります。

一例を挙げると、先ほどの 연달어 (ヨンダロ) [「続き」の意味] は校訂本では 연달아 (ヨンダラ) です。

また真ん中あたりに 2 回出て来る「朝」は、標準語では「아침」(アチム) ですが、ここでは「아침」(アチュム) となっています。このあたりに尹東柱が育った地域の言葉、音の響きを感じられます。

次の詩は「恐ろしい時間」です。

冒頭の거「コ」という言葉を「その」と訳してみました。「コ」は、거기「コギ」(そこ)

の省略形か、あるいは **크짓**「クゴッ」（それ）から来た感嘆詞と思われます。

「その わたしを呼ぶのはだれですか」

「その」は、「わたしを呼ぶもの」がいると思われるあたりを指しているのでしょうか。

「一度も手を上げてみることもできないわたしを／手を上げて示す天もないわたしを」

「どこにわたしの身を置く天があって／わたしを呼ぶのですか」

自分が存在することの意味、理由がわからない。見出せない。堂々と身を置くところもない。力も資格もない。

「事が終わってわたしが死ぬ日の朝には……」

そのままやがて死んでいくような自分。その自分を誰かが、何ものかが呼んでいる。恐ろしいのです。自分を呼ぶその誰かとは、時代でしょうか。使命？ 何か超越的な存在、神でしょうか？

나를「ナルル」（わたしを）が 5 回出て来るのも印象的です。

詩は「わたしを呼ばないでください」で終わります。呻くようにそう言うのですが、尹東柱を呼ぶ声は、後にやがていよいよはっきりしてきます。

（2）人を思う尹東柱

「弟の印象画」

赤い額に 冷たい月が差し／弟の顔は 悲しい絵だ。

歩みを止め／そっと幼い手を握って／「お前は大きくなったら何になる」

「人になる」／弟の悲しい ほんとうに悲しい答だ。

そおっと 握っていた手を放し／弟の顔を もう一度見つめる。

冷たい月が 赤い額に濡れ、／弟の顔は 悲しい絵だ。

「悲しい」（3 回）と感じるのは、弟を心から愛しているからでしょう。

この詩を書いたとき、尹東柱は延禧専門学校の 1 年生で満 20 歳、弟の尹一柱^{ユンイルジュ}は 10 歳でした。十も年が離れています。

詩の日付は 1938 年 9 月 15 日となっています。この日付は重大です。というのは、その 5 日前の 9 月 10 日、朝鮮総督府の強要によって、朝鮮イエス教長老会〔長老教会の正式名〕総会は神社参拝決議をしたのです。場所は平壤^{ピョンヤン}。尹東柱のその家族は長老教会の信徒です。家族の暮らす故郷は、行政的には朝鮮ではなく「満州国」間島省なのですが、教会としては朝鮮イエス教長老会東満老会〔教区〕龍井^{ヨンジョン}中央教会に属していました。

2年前、尹東柱は崇実^{スンシル}中学校（平壤）の時代、当局の学校に対する神社参拝強要に抗議して自主退学したのでした。崇実中学校は長老教会に属する学校です。

この詩を完成させた時点で、尹東柱が長老教会総会の神社参拝決議を知っていたかどうかはわかりません。しかし日本の圧政下にあって、それなりに「人になる」ようなどんな明るい未来がありうるのか。そういう思いが、弟の「人になる」という答えを聞いたときに湧き起こってきたのかもしれない。

「星を数える夜」

尹東柱の代表作のひとつです。

「季節が移りゆく天には／秋でいっぱい 満ちています……」

「星ひとつに 追憶と／星ひとつに 愛と／星ひとつに 寂しさと／星ひとつに 憧れと／星ひとつに 詩と／星ひとつに お母さん、お母さん、」

この詩には「母」「お母さん」が4回出てきます。そのうち2回は呼びかけです。

「お母さん、／そしてあなたは遠く北間島(プッカンド)におられます。」

遠く離れた故郷の母に、尹東柱は呼びかけます。当時23歳の彼は、延禧専門学校の4年生でした。

延禧専門学校のあるソウル（当時、京城）から故郷の龍井^{ヨンジョン}まで汽車でどれくらいかかるのかを、1938年の「朝鮮列車時刻表」で調べてみました。午前3時50分京城発の列車は、清津^{チョンジン}、上三峰^{サンサンボン}を経て龍井までの直通車両があつて、龍井到着は12時37分です。9時間弱ということになるのでしょうか。

この詩には立ち止まって思いめぐらすべき重要な点がいくつもあります。今は彼の母への思いを大切に受けとめるに留めて、次に進みます。

「少年」

ほとんどの詩が短い節で改行を重ねるのに対して、この詩は全体が改行なしで続いています。

「そこかしこ紅葉^{もみじ}のような悲しい秋がはらはらと落ちる。紅葉が落ちてきたところごとに春を備えて、木の枝の上に空が広がっている。そっと空をのぞき見ようとすると、眉毛が青く染まる。両手で温かい頬を撫でてみると、手のひらも青く染まる。」

「悲しい秋」とあります。「悲しい」「悲しむ」は尹東柱の詩の大切なキーワードの一つのようです。

空の青い色が眉毛を、頬を、そして両手を染めてきます。

「もう一度手のひらをのぞき見る。手の筋には澄んだ川の水が流れ、澄んだ川の水が流れ、」

「澄んだ川の水が流れ、澄んだ川の水が流れ」

맑은 강물이 흐르고, 맑은 강물이 흐르고

(マルゲン カンムリ フルゴ、マルゲン カンム리 フルゴ)

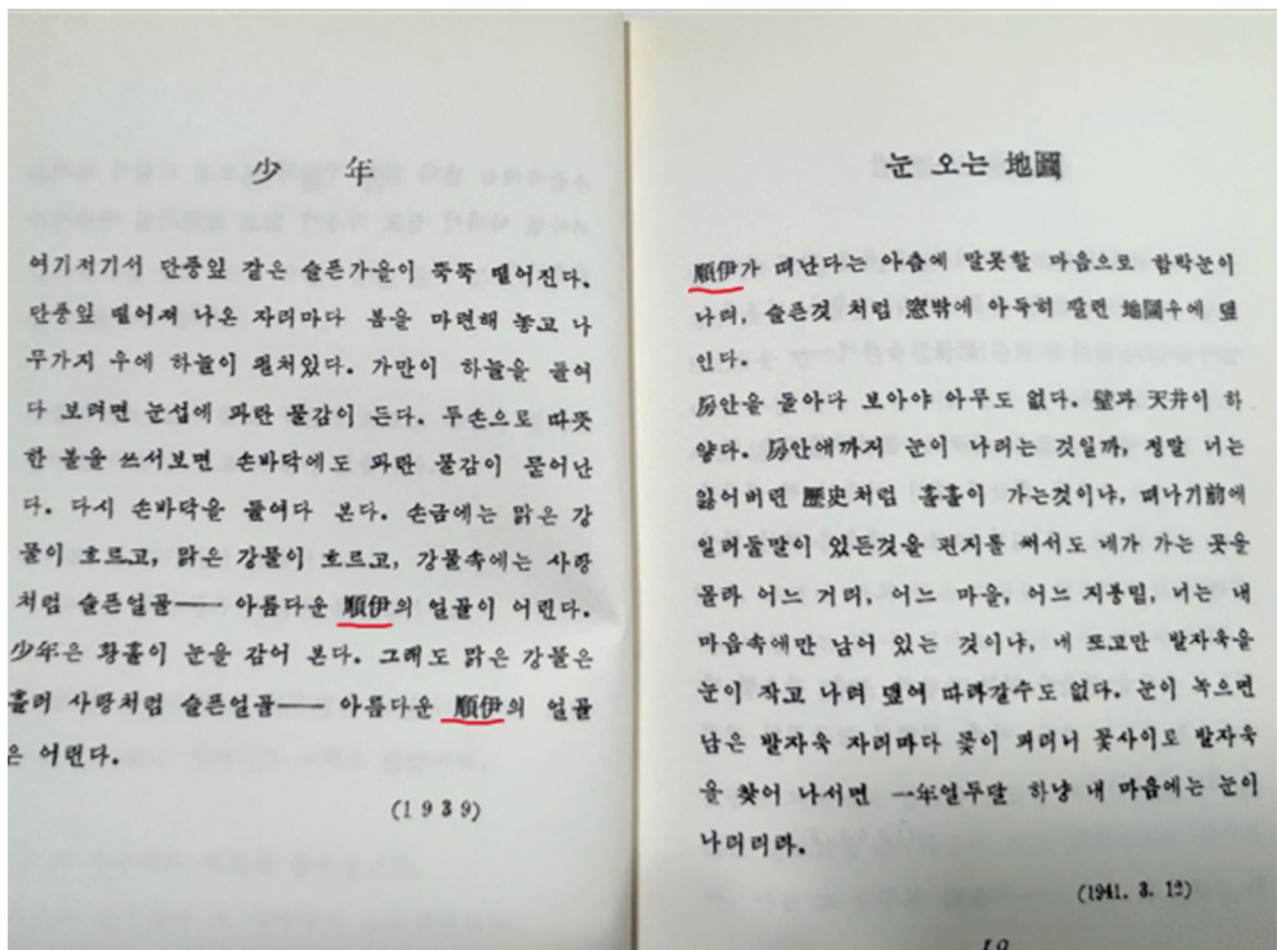
この繰り返しがとても美しい。音の響きも情景もとても美しいと感じます。

「川の水の中にはいとしくも悲しい顔 —— 美しい順伊（スニ）の顔が映る。少年はうっとり目を閉じてみる。なおも澄んだ川の水は流れ、いとしくも悲しい顔 —— 美しい順伊（スニ）の顔は映る。」

青く染まった眉、頬、手……。その手に流れる澄んだ川の水の中に、いとしくも美しく美しいスニの顔が映る。詩人は、その心の深いところで、スニのことを思い続けているのです。青く美しく澄んだ光景、切ない思いです。

先ほどご紹介した「跋文」の姜処重が、「しかしその愛をその女性にも友人にも最後まで告白しなかった」と書いていたことと重なります。

初版本を見て気づくのは、この「少年」の次に「雪降る地図」が置かれていることで



す。ちょうど左右見開きになっています。「雪降る地図」の冒頭に「順伊」が出て来ます。この詩では、順伊が去って行き、自分はその足跡を追って行きたいのに、雪が降りしきって後を追って行けないと歌います。

制作年代が違う二つの詩をこのように並べたことの中に、尹東柱の思いがこめられているのでしょう。また 19 編からなる「天と風と星と詩」の 3 つ目、4 つ目という早い場所にこの二つの詩を置いたことも注目されます。大切なスニを歌った二つの詩です。

尹東柱詩人の弟への思い、母への思い、そして順伊と彼が詩の中で呼ぶある女性への思いに触れてみました。

(3) 決意する尹東柱

「十字架」

これも代表作のひとつです。

「尖塔があれほど高いのに／どうして登ってゆけるでしょうか。

鐘の音も聞こえてこず／口笛でも吹きつつ さまよい歩いて、

苦しんだ男、／幸福なイエス・キリストにとって／そうだったように／十字架が許されるのなら」

迷いためらいつつも、彼は十字架のイエスのもとに戻ってきます。そして自分にも「十字架が許されるなら」……

「首を垂れ／花のように咲きだす血を／暗くなってゆく天の下に／静かに流しましょう。」

もっとも大切なことのために自分の命をささげることを決意するのです。

「序詩」

尹東柱の代表作です。延禧専門学校卒業の約 1 ヶ月前、24 歳になる少し前の作品です。

「死ぬ日まで天を仰ぎ／一点の恥なきことを、／木の葉に起こる風にも／わたしは苦しんだ。／星をうたう心で／すべての死んでゆくものを愛さなければ／そしてわたしに与えられた道を／歩みゆかねば。

今夜も 星が 風にさらされる。」

「星」とは何でしょうか。ほんとうに大切なものに違いありません。朝鮮の歴史、文化、言葉、隣人、魂、自分自身……。

「風」とは何でしょうか。時代の悪しき力かもしれません。あるいは、彼を使命へと促す、あの呼びかける声なののでしょうか。複数の意味がこめられているようにわたしには思えます。

「わたしに与えられた道を／歩みゆかねば」

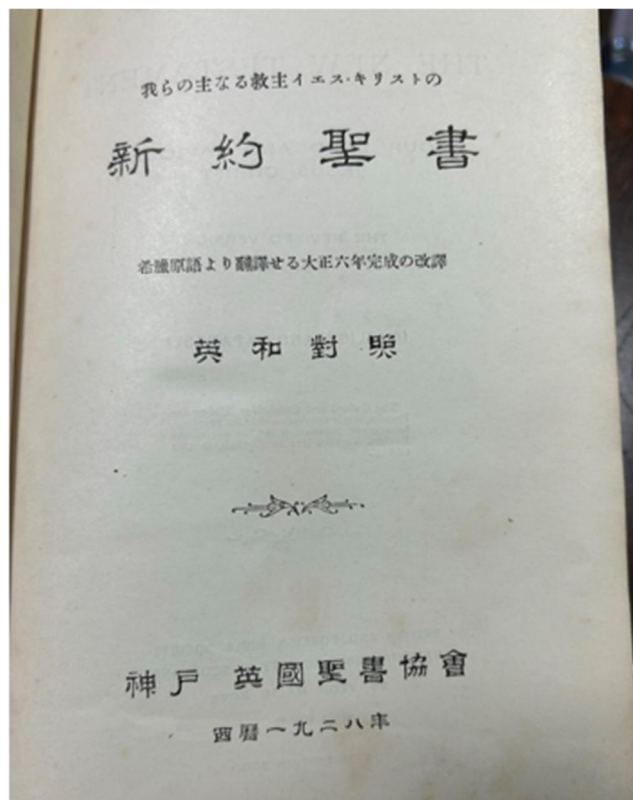
自分に与えられた道を歩みゆく決意が、この詩に示されています。

ここまで、彼の面影を追って、道を模索する尹東柱、人を思う尹東柱、決意する尹東柱とたどってきました。彼は厳しい時代の中で、ためらい、恐れおおのき、家族を思い、また恋する人を思い、そしてやがて生きることの決意に至りました。もちろん彼は一直線に進んだというのではなく、何度も揺れ動き、行きつ戻りつしつつ、やがて自分の使命を引き受けることを確信し決意した。それが、日本留学につながったのではなかったかと思えます。

5. おわりに

尹東柱は獄中で、月に1枚だけ家族に葉書を出すことを許されていました。その葉書で「英和対照新約聖書」がほしいと頼みました。そうして送られてきたその聖書が、彼の頼りであり力であったことでしょう。そのヨハネ福音書の初めのほうにこうあります。

「もろもろの人を照らすまことの光ありて、世に来たれり」 1:9



「彼は世にあり、……世は彼を知らざりき。」 1:10

この「光」はイエス・キリストのことを指していますが、そのイエス・キリストの光に照らされて、尹東柱自身が清らかな輝きを放つ光であったと思います。

大日本帝国は彼を迫害し、彼の命を奪いました。

「世は彼を知らざりき」

わたしたちは彼を守ることができませんでした。それには日本に責任があり、日本人に責任があります。

ところで今日は2月11日、「建国記念の日」とされています。しかし天皇制日本国家は、愛する尹東柱を死に至らせた。わたしは、日本の侵略戦争と植民地支配の歴史を美化し、正当化しようとする「建国記念の日」に断乎反対します。

「序詩」の中で尹東柱はこう言いました。

「すべての死んでいくものを愛さなければ」

この詩が、この詩をとおして尹東柱が、わたしたちに呼びかけています——命あるものを尊ぶように、弱いものを大切にするように、死んでいくすべてのものを慈しむように、と……。

